認定NPO法人 Dialogue for People

2021年度 活動報告書

HEADLINE

入管収容問題、人権の現在地…2021年度に取り組んだ取材活動／取材地マップ／訴訟に関する記者会見

COLUMN

それは「骨」ではなく「人」――不条理を越えて響く祈り（福島県・大熊町）

Dialogue for People

戦火の厳しさが増すシリア北東部の街で。友人宅にて濃いコーヒーを飲みながら談笑する、かけがえのないひととき。（シリア、2018年5月／佐藤慧）

「こうしてお茶を飲んで、笑い合えることが何よりも幸せなこと」

戦禍に生きる人々が、束の間の平穏を慈しむように呟きました。様々な不条理や世界の歪みは、声の小さな人々の日常にこそ、大きな影を落とします。構造的な視点で社会の歪みを眺めたとき、その問題は「どこかの誰か」の問題ではなく、「私たち自身の問題」であることに気づくでしょう。そこに生きる、唯一無二の存在である「あなた」の笑顔を思い浮かべながら。

Dialogue for Peopleは、みなさまのご支援のおかげで、2022年1月「認定NPO法人」になることができました。

これからも、常に時代に合わせたアップデートを繰り返し、次世代に継承していく「活動の場」を育んでいきます。

あなたの目線で、世界を見てみる

ごあいさつ

誰しもに関わる問題に
「人権」や「平和」といった価値観を軸に
「対話」を育んでいく

いつもご支援、ご協力をありがとうございます。おかげさまで Dialogue for People（D4P）は無事第三期を終え、2022 年 1 月、「認定 NPO 法人」になることができました。みなさまの温かく、力強いご支援の賜物であり、心より感謝申し上げます。

メディアは現状、株式会社が多数を占めますが、スポンサーありきの経営により、見過ごされてしまう社会課題が少なからずあることや、世間の関心が低いと見做される問題は長期的に取材することが難しいなどのデメリットも抱えています。しかし、特に社会課題の解決のために必要な情報というものは、本来誰しもが知る必要、そして知る権利のある、公共性の高いものではないでしょうか。

NPO 法人として市民社会の中から発信活動を行うことにより、そうした意識を共有する人々の支えのもと、市場価値ではなく、「人権」や「平和」といった、多様な人々が共に生きていくためには欠かせない価値に軸を置き、継続的な取材・発信を行うことができると考え、弊会はメディア NPO という形での活動を続けています。

収束の見えないコロナ禍や、大国による侵略戦争、いまだ数々の困難に直面する難民の人々――こうした問題は、国境の内外を問わず、誰しもに関わる問題です。みなさまと一緒に、この 1 年も建設的な「対話」の生まれる社会を目指して歩んでいけましたら幸いです。

認定 NPO 法人 Dialogue for People

代表理事　佐藤 慧

About us

Dialogue for People とは

日常から零(こぼ)れ落ちる声なき声に寄り添い、社会課題に光をあてる

Dialogue for People は、写真や文章、映像など様々な表現を通じて、困難や危機に直面する人々の声や社会課題の渦中にある地域の現状を、共に同時代を生きる全ての人々に「伝える」ことを主軸として活動するメディアNPOです。

どこか遠くの問題に思えてしまう出来事について、誰もが考え自分の役割を見つける機会を創造し、社会課題の解決に繋がるきっかけを生み出していきます。

Concept

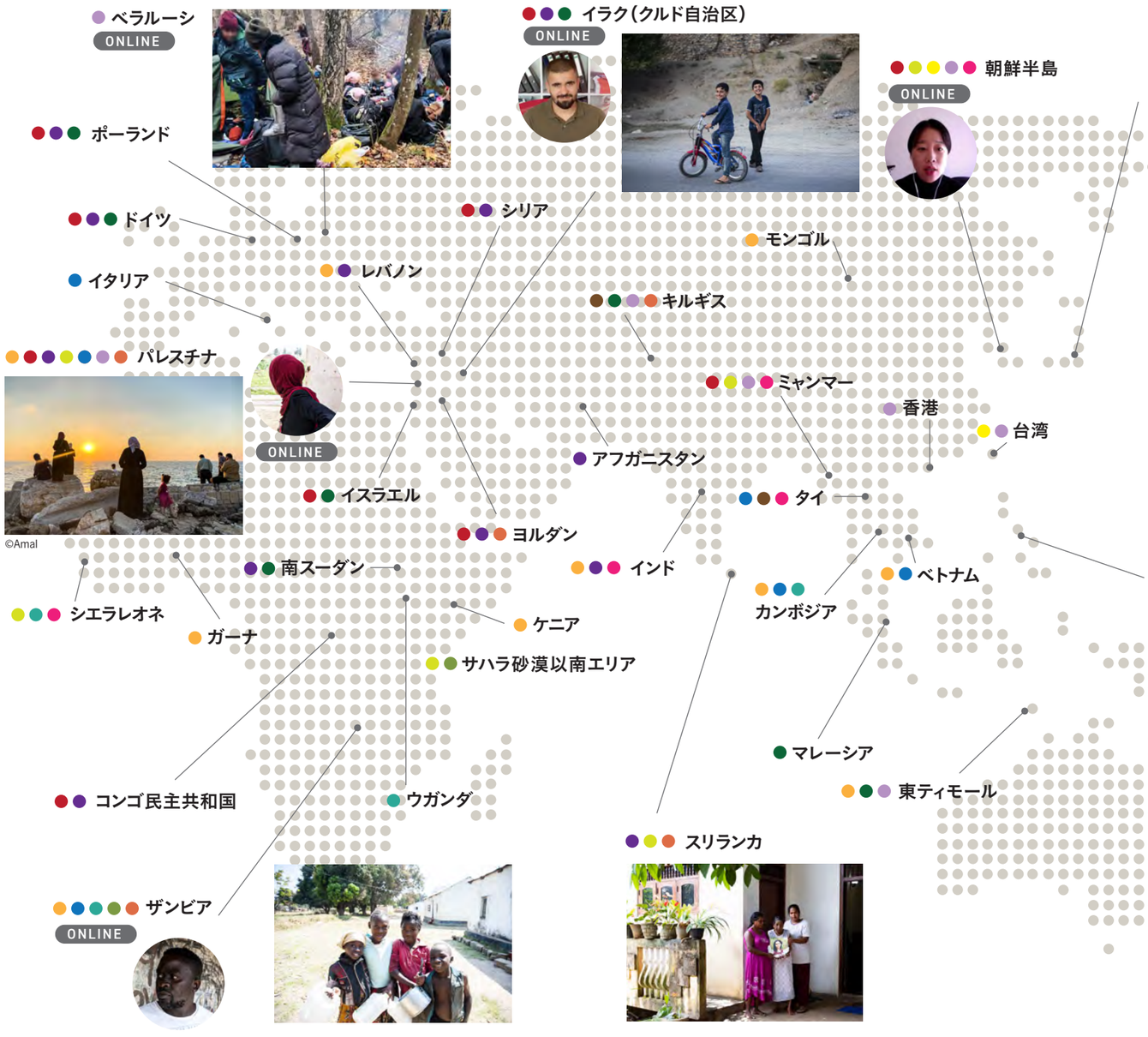
P3（上）「写真撮ってよ！」と、教会の庭園で声をかけられた。「教会は退屈なこともあるけど、オシャレをしても怒られないから好き」と笑う。（東ティモール、2016年／佐藤慧）｜（下）地元のサッカーチームの応援には、近所中の人々が駆け付ける。ちゃっかりフィールドで一緒にボールを蹴っている子どもたちも。（ザンビア、2019年／佐藤慧）

世界地図でみる Dialogue for People の取材活動

この世界地図は Dialogue for People フォトジャーナリストの佐藤慧、安田菜津紀が直接取材した地域や、インタビューでお話を伺った方の活動地などを含めた取材先をまとめたものです。うち、2021年2月～2022年1月の取材先の一部は写真を用いて紹介しています。新型コロナウイルス感染拡大による渡航制限の影響を受け、昨年に続き海外取材のほとんどがオンラインによるものとなりましたが、9月にスリランカでの現地取材を行うことができました。
耳目を引きやすい新しい（New）ものごとにスポットライトが当てられる「ニュース」において、日本から遠く離れた地での紛争や貧困、差別の問題、国内における常態化してしまった社会問題や被災地の状況などは、なかなか身近には伝わってきません。一方こうした危機を同時代的に経験する中で、少しずつでも想像し、自分との繋がりを考えることができるようになってきた「そこに生きる一人ひとりの状況」というものがあるのではないでしょうか。この世界地図に広がる各地との繋がりをこれからも大事にしながら、頂いた声を丁寧に届ける取材活動を継続してまいります。

- 子ども・教育　学校訪問、青少年交流、児童労働、教育支援など
- 戦争・紛争　国家間・地域間・民族間の争い
- 難民　世界における難民の状況や日本の難民受け入れ
- 人権侵害　人の生命や自由と、それらを脅かすもの
- 貧困・格差　経済的な困窮状態や、ものやサービスへのアクセシビリティの制限など
- 差別　人種・皮膚の色・性・言語・信条・国籍・社会的地位・経済状況などの違いによる不当な扱い
- 災害・防災　自然災害の影響、防災に関する取り組み
- 医療・ケア　HIV/AIDS、グリーフケア、心のケアなど
- 平和　戦争・紛争後の社会構築、人々の平和に向けた取り組み
- 政治・経済　選挙、政治・経済体制の転換など
- 女性・ジェンダー　女性のエンパワーメント、性暴力など
- 自然環境　環境問題、生物多様性など
- 文化・スポーツ　音楽やアート、食文化、スポーツ、伝統行事、慣習など

※ 写真は丸い形が個人へのインタビュー、四角形がオンラインも含む現地取材



日本

- 陸前高田市・釜石市・大槌町（岩手県）
  石巻市・女川町（宮城県）
  南相馬市・大熊町（福島県）
- 岩泉町 なかほら牧場（岩手県）
- 石岡市 八郷半田（茨城県）
- 茨城県
- 牛久市 東日本入国管理センター（茨城県）
- 長野市穂保地区（長野県）・いわき市（福島県）
  佐野市（栃木県）
- 無言館（長野県）
- 川崎市（神奈川県）
- 東京都内各地
- 名古屋出入国在留管理局（愛知県）
- 大阪府・京都府・兵庫県各地
- 真備町ほか（岡山県）
- 広島県・長崎県
- 宇部市床波海岸（長生炭鉱跡地）
- 豊島（香川県）
- 宇和島市（愛媛県）
- 熊本市・益城町ほか（熊本県）
- 浦添市・うるま市・高江ほか（沖縄県）
- その他国内全域
- アメリカ（ワシントンD.C.）
- グアテマラ

Our Policy

取材で大事にしていること

Dialogue for People では、それぞれの繋がりや個性を活かし、長期的な関係性の中で見えてくる思いや言葉を大切に、現地の人々と歩幅を合わせながら取材活動に当たっています。社会課題の解決に取り組むNGOや団体、志を同じくする人々と協働することもあり、互いの役割を持ち寄ることで、より深く、意義のある活動を行っていきたいと考えています。いずれの取材も、どこかで「終わり」の来るものではありません。境界線を越えた平和な世界の実現に向けて、国や地域にとらわれず、必要とされている取材を続けていきます。

2021年度の取材テーマと内容

新型コロナウイルス感染拡大の影響が続く中、2021年度も海外取材はオンラインが中心となりましたが、9月にスリランカに赴き、2021年3月、名古屋入管で亡くなったウィシュマ・サンダマリさんの故郷を訪れることができました。継続的に取材を行うパレスチナやイラクでは、現地パートナーとのやりとりを続け、それぞれの国や地域の状況を注視してまいりました。国内取材においては、昨年に引き続きヘイトに関わる問題や、加害の歴史、そしてさまざまな問題の根底にある人権意識に関する取材を行ってまいりました。以下に主な取材のテーマ・内容を紹介します。

入管収容問題

命の線引きをする社会に声をあげる

2021年3月6日、名古屋出入国在留管理局の収容施設にて、スリランカ人女性、ウィシュマ・サンダマリさんが亡くなりました。入管での死亡事案はこれが初めてではありません。2007年以降、収容施設内で亡くなるのはこれで17人、うち5人は、自ら命を絶っています。

4月には、入管法政府案が衆議院で審議入りしましたが、人道上の問題をはらむ改定案に多くの反対の声があがり、法案の成立は見送られました。

「在留資格」の有無で命の線引きがされてしまう――。2021年は、この問題の根底にある「命の尊厳」を軸に取材を続けてきました。

人権の現在地

私たち一人ひとりがアップデートを繰り返していく

1948年、「世界人権宣言」という、基本的人権のリストであり、国際的な人権保障にとっての最重要文書が国連で採択されました。それから半世紀――。

ジェンダーの分野では、家父長制や男性優位社会に虐げられてきた女性たちが、世界中で声をあげています。また、国境を越えた難民問題では、その人のバックグラウンドや人種、国籍にかかわらず、基本的人権は誰しもに守られるべきものであるということを前提に、現行法や制度の改革を望む声が高まっています。私たち一人ひとりが、そうした社会のアップデートの一助となれるようジェンダーや国籍、ルーツにもとづく差別的な構造の引き起こす問題について取り組んできました。

COVID-19状況下の取材先（取材パートナーとの連携）

©Amal

戦争の理不尽を伝える現地の声

新型コロナウイルスの流行はまだまだ世界的に収束せず、海外取材へ行く機会はめっきりと減りました。けれど、これまでの取材で一緒に発信を続けてきた仲間たちとの繋がりによって、海の向こうの出来事も、等身大の声と共に伝えることができました。

パレスチナはガザ地区在住の取材パートナー、Amalさんは、5月にはイスラエルによる空爆の下、その恐怖を自らの声で伝えてくれました。1歳にも満たない息子を抱えながら震えるAmalさんのメッセージからは、「戦争」というものがいかに理不尽に人々の日常を破壊するかということを突きつけられました。

海外現地取材（スリランカ取材）

その人の生きた軌跡を辿る

名古屋入管で亡くなったウィシュマさんの取材を続けるうちに、真相究明はもちろんのこと、彼女が生前どのような人だったのか、どんな日常を送っていたのかということを知る必要があると思うようになり、スリランカへ渡航しました。

ご家族やお寺の住職、ウィシュマさんから英語を教わっていた生徒さん、様々な方のお話を聞かせて頂き、いかに大切な存在が失われてしまったのかということを痛切に感じました。それが誰であろうとも、一人ひとりの声に耳を傾けること、その命に寄り添うことの大切さを再認識しつつ、発信を続けてきました。久しぶりの海外取材となりましたが、やはり現場に赴くことで感じる情報は欠かせません。

Column

それは「骨」ではなく「人」——不条理を越えて響く祈り

帰還困難区域内で見つかった遺骨は、10年9ヵ月、木村紀夫さんの探し続けた娘の遺骨だと見られている。ひとりの人間の尊厳を奪う不条理に、祈りと、次世代への学びを——。

福島県大熊町——。この町には東京電力福島第一原子力発電所の1号機から4号機までが立地している。そこに木村紀夫（きむら・のりお）さん一家の住居があった。2011年3月11日、街を襲った大津波により、小学1年生だった汐凪（ゆうな）さん、木村さんの父、王太朗（わたろう）さん、妻の深雪（みゆき）さんが行方不明となった。ところが翌12日、原発事故によって大熊町は「全町避難」を余儀なくされる。その後、王太朗さんと深雪さんは遺体となって見つかったものの、汐凪さんだけが発見できなかった。木村さんの自宅周辺は放射線量の高さから「帰還困難区域」に指定され、今も解除されていない。

その後、木村さんは限られた一時帰宅の時間を使い、汐凪さんの捜索を続けてきた。2016年11月、環境省に依頼して重機での捜索を開始。翌月、泥だらけのマフラーから、汐凪さんの首の骨の一部が見つかった。木村さんは当時の心境を、「喜ばなければならないと思うのに、喜べない」と語った。実は震災の翌日、木村さんの自宅周囲を捜索していた消防団員たちが、誰かの「声」を聴いているのだという。状況からすると、父の王太朗さんだった可能性が高い。けれども原発事故は、わずかな望みにかけたその捜索までも阻んでしまった。王太朗さんが見つかった場所と汐凪さんの遺骨が見つかった場所はさほど離れていない。だとすれば、津波に巻き込まれた後も生きていたかもしれない王太朗さんと汐凪さんを、自分は置き去りにしてしまったのではないか——そんな自責の念が拭えなかったのだ。

木村さんを沖縄に誘ったのは、2021年4月のことだった。激しい地上戦が続いた沖縄では、推定で約9万4千人の住民を

Area Information

大熊町区域図

①避難指示解除済
②立入規制緩和・避難指示解除区域
③帰還困難区域
④中間貯蔵施設エリア
⑤福島第一原発敷地

（2020年6月の情報をもとに作成）

津波被害を受けた施設などを案内する木村さん（右）。

P9
汐凪さんのものと思われる遺骨を愛おしそうになでる木村さん。

P10
大腿骨発見の瞬間。具志堅さんから「良かったあ……」と安堵の声がこぼれる。

含む、20万人以上が犠牲になったとされている。とりわけ激戦が展開された本島南部では、「どこを掘っても遺骨が出てくる」という。そんな沖縄のあちこちで、40年近くにもわたり、戦没者の遺骨捜索を続ける具志堅隆松（ぐしけん・たかまつ）さんのもとを、木村さんと共に訪れたのだ。現在、辺野古の新基地建設の計画変更により、そうした遺骨が混じっているかもしれない土砂が、埋め立て工事に使われる可能性があるという。具志堅さんはそんな国の方針に対し、「戦没者への冒涜だ」と、ときにハンガーストライキも行い、強く抗議を続けてきた。

本島南部、糸満市内の日本軍の壕の跡地を訪れた際、木村さんは率直に具志堅さんにこう尋ねた。自分の娘ひとりのために、捜索をまだ続けたい、見つかった場所は慰霊のための場所にしたいというのは、「わがまま」なことなのだろうか、と。 具志堅さんは木村さんを真っすぐ見つめ直し、言葉に力を込めた。
「これは人間の尊厳の問題です。例えたったひとりであったとしても、あなたには声をあげる権利があるんですよ。“ひとりの利益のために全体の利益を損なうな”という人がいますけれど、ひとりの人間を大切にできないのに、みんなを大切にできるはずがないんですよ」

そして2022年の元日、今度は具志堅さんが木村さんのもとを訪れた。特別な許可をもらい、共に帰還困難区域へと捜索に入った初日、地表を掘り始めてからわずか20分足らずで、「木村さん！」と具志堅さんが声色を変えた。枯草の根本からは、遺骨らしきものの一部が顔を覗かせている。
「今、お父さんが掘りだすからね」
具志堅さんは穏やかに声をかけつつも、手早く周囲の土を払い続けた。けれど、土を除きながらも、具志堅さんは自身で遺骨を取り上げようとはしなかった。それは、父である木村さんの役割だと見守っていたのだ。そして——。
土にまみれた25センチほどの骨を木村さんが拾い上げ、愛おしそうに何度もなでた。「すげえ……」。あとはほとんど、言葉にならないようだった。「よかった、汐凪ちゃん帰れるよ」と具志堅さんが声を震わせると、涙をこらえながらも、木村さんの表情がかすかに緩んだ。見つかったのは、右足の大腿骨だった。汐凪さんの首の骨が見つかった場所からわずか6メートルほどの距離から発見されたことや、子どもの骨であること、遺骨の一部が見つかるまで汐凪さんが大熊町最後の行方不明者であったことなどから、この大腿骨も汐凪さんの遺骨と見られている。遺骨が見つかったのは約5年ぶり、それも、下半身の骨が見つかったのは初めてのことだ。「親と子が呼び合う力だ」と、具志堅さんは何度もかみしめるように語った。一方でこうも強調する。「骨じゃないんです、人なんです。だから、帰る権利がある。原発事故で捜索が阻まれた不条理があったのであれば、国や自治体には何年かけてでも探す責任があるのではないかと思います」。

具志堅さんは、沖縄南部の戦没者の遺骨収集を、自分たちの世代だけでは終わるものではないと実感しているという。「だからこそこうした場所は、戦死者への慰霊と、次世代の平和学習の場にしていくべきではないかと思っています」。それは木村さんの、「汐凪の遺骨の眠る土地を、慰霊や伝承の場として残していきたい」という思いにも重なる。「悼む」ことを蔑ろにし、教訓を置き去りにする社会は、果たして望ましい社会のあり方なのか。二人の活動とその出会いから生まれたものが、私たちに強く、問いかけている。

（写真・文　安田菜津紀）

福島県・大熊町での取材映像はこちら ▶▶▶

さまざまなかたちで「伝える」「届ける」

頂いた声や思いを、その受け手である「あなた」へと大切に届けること——。Dialogue for People が発信する情報は、そんな「あなた」と「世界」を繋ぐ架け橋で在れたらと思っています。

加速度的に世界が様相を変えていく今の時代、「前代未聞」の社会課題に対する答えは決してひとつではありません。ときにあまりにも大きな困難に、無力さを痛感することもあるかもしれませんが、様々な発信を「きっかけ」に、自分だけでは見出せない未来の多様性に触れ、一人ひとりがより良い今、そして未来について考えていければと願っています。

どのような表現にも、伝えられない「余白」があります。しかしその余白を情報の不足と捉えるのではなく、枠の外にある無限の可能性として考えられる、そんな表現・発信を行っていきます。

D4Pウェブサイト記事

紛争地や被災地の取材レポート、インタビューやエッセイなど幅広い記事を執筆しています。

入管法政府案の問題点を多角的に発信 取材レポート

難民申請中の強制送還が可能になることや、国外退去命令に従わなければ処罰が下されるなど、あまりにも多くの問題をはらんだ入管法政府案。弁護士や支援団体の方々のインタビューや市民団体の活動などを積極的に取材し、発信を続けてきました。

この社会は本当に「戦後」を迎えたのか？

'21夏特集

戦争の災禍を二度と繰り返さないために——加害の歴史や本来大切にされるべき個々人の尊厳を見つめ、戦後のあゆみ方を捉え直す特集を展開しました。

生活者として見つめるパレスチナの現状

現地取材パートナー寄稿

子育て、家族行事、仕事…パレスチナ・ガザ地区に生きる生活者の視点から、そこに伴う困難はどのようなものか、現地在住の Amal さんに寄稿いただきました。

ルーツをたどる旅から見えてきたこと

エッセイ・取材レポート

亡くなった父の「外国人登録原票」の交付請求をきっかけに、少しずつたどってきたルーツの旅。朝鮮半島と日本、在日コリアンの歩みと向き合いながら取材を続けています。

もっと知りたい **実際に記事を読んでみる**

上記を含め、Webには多様なテーマに関する記事を掲載しています。
記事から記事へ読みすすめる中で新たな発見も。詳細はこちら⇒

数字で見る「2021年度の伝える活動」

D4Pweb 記事	75 本	YouTube 動画	95 本	講演	109 件
出演	147 回	執筆	176 件	インタビュー	48 件
撮影/写真提供	24 件	写真展	4 件	音声配信	51 件
イベント	3 回	出版関連	2 件		

※そのほか（フリーマガジン発行・審査等）4件

YouTube動画・配信

独自の取材映像や社会問題の解説など幅広く展開。
2021年度はYouTubeラジオがスタートしました！

2021年3月より、ラジオ型YouTube番組「Radio Dialogue」がスタート！

YouTube では、毎週水曜夜に生配信でお届けするラジオ番組「RadioDialogue」をスタートさせました。毎回テーマを設け、取材報告やゲストにお話を伺うなど社会状況にあわせ柔軟に発信。リスナーの方々とのコミュニケーションからはいつも大きな学びをいただき、取材・発信の新たな視点に繋がっています。

人々の「声」から見つめる世界 Voice of People

震災から10年が経過する東北、目を背けてはならない戦時の加害の歴史、自然と循環する暮らしの営み、ウィシュマさんの生きた軌跡 … 人々の声から世界を伝える、D4Pの独自取材映像コンテンツです。

カルチャーから知る朝鮮半島のこと

早稲田大学韓国学研究所と共催で続けている、カルチャーを切り口に朝鮮半島と日本の関係を見つめるシリーズ。
映画や音楽、街歩きなどさまざまな切り口でお届けしています。

NGOが向き合う、世界の支援現場のいま

さまざまな分野のNGOで働く方をゲストに迎え、支援現場の様子や現地の声、活動にかける思いについてじっくり伺います。

荻上チキさん解説 社会問題・現象を一歩踏み込んで考える

評論家・荻上チキ氏による、社会問題を紐とくヒントが得られる解説番組 Chiki’s Talk。書籍紹介 Chiki’s Library も。

もっと知りたい **実際に動画を観てみる**

YouTubeではこのほかにもたくさんの動画を随時更新しています。
新着配信のお知らせはチャンネル登録が便利です⇒

フリーマガジン「VOICE OF LIFE」

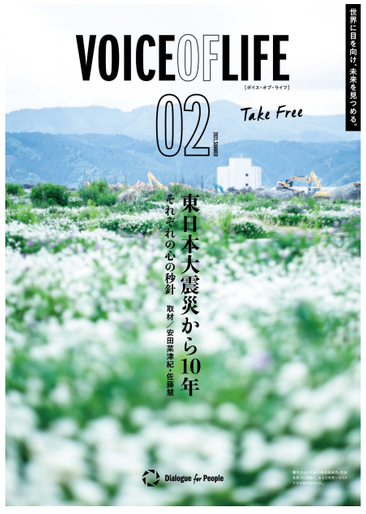
”世界に目を向け 未来を見つめる” をテーマに、2020年10月に創刊したフリーマガジン「VOICE OF LIFE」。佐藤慧、安田菜津紀が現地で出会った人々や地域を撮影した写真を、大きなサイズでご覧いただけます。

紙面をさわりながら、ページを繰りながら、世界に思いを馳せる時間を。特集やコラムは毎号テーマを変えてお届けしています。

Information

東日本大震災から 10 年―― 心が刻む秒針の速度はそれぞれ違う

2021年夏に刊行した vol.2 では、東日本大震災からの10年間をテーマに、岩手、宮城、福島で出会った方々が歩んできた日々や、抱いている思いについて、伺ったことを綴りました。
記事・コラム本文はこちらから⇒



見開き B3 サイズ／2021年度 5,000 部発行

連載

安田 菜津紀

- CAPA（ワン・パブリッシング）「ドキュメンタリー写真家のメッセージ」（2014 年 4 月～）
- 考える人（新潮社）「安田菜津紀の写真日記」（2016 年 4 月～ 2021 年 9 月）
- みんなのねがい（全国障害者問題研究会）写真提供（2017 年 3 月～）
- 日本経済新聞「COMEMO」（2018 年 3 月～）
- 中日新聞「EYES」（2020 年 1 月～）
- WOWOW 公式 note「シネピック」（2020 年 4 月～）
- 論座（朝日新聞社）「あなたのルーツを教えて下さい」（2020 年 4 月～）
- 月刊「ヒューマンライツ」（部落解放・人権研究所）「言葉と写真で世界をみつめる」（2021年 3 月～）
- 生活と自治（生活クラブ連合会）「対話する日々の中で」（2021年 5 月～）
- 政治プレミア（毎日新聞）連載（2021年 8 月～）
- 商工新聞（全国商工団体連合会）「随想」（2021年 12 月～）
- 沖縄タイムス「心のお陽さま」（2022 年 1 月～）

佐藤 慧

- 真宗大谷派（東本願寺）真宗会館「サンガ・レンズの奥の瞳」（2021年 1 月～）

レギュラー出演番組

安田 菜津紀

- **TBS テレビ「サンデーモーニング」**
  コメンテーター（月 1 回 ～）
- **YouTube「ワラしがみ」コネラジ**
  金曜日日替わり MC（2021年 4 月～ 9 月）
- **J-WAVE「JAM THE WORLD」**
  水曜日 ニュース・スーパーバイザー（～ 2021年 3 月）
- **ポッドキャスト「UP CLOSE」**（2021年 4 月～ 7 月）
- **Amazon Music「JAM THE WORLD - UP CLOSE」**
  ニュース・スーパーバイザー（2021年 8 月～）

佐藤 慧

- **エフエムゆーとぴあ「おしゃべりミュージック BOX」**
  Dear My Wonderful World 出演（2021年 6 月～ 12 月）

写真展

安田菜津紀 写真展「照らす　生きた証を遺すこと」

東日本大震災から10年。亡くなった方々の生前の姿を伝えてくれたのは、その方が日常の中で使っていた品々や、身近な方による追憶の言葉でした。足跡をしるす何かに触れる度、その人は何を大切に暮らし、どんな生き方をしてきたのか、私自身も思いを巡らせてきました。この写真展のタイトルは、亡くなった息子さんのことを語ってくれた方の「生き方が表れていないと、死が照らし出せない」という言葉から考えたものです。展示では、東北をはじめ日本国内の取材で出会った方々の、身近な方が遺したものを写真で照らし、改めて生きた証を刻みたいと思っています。（安田菜津紀「展覧会によせて」）

Information

安田菜津紀写真展「照らす　生きた証を遺すこと」

会期　2021年 4 月 15 日～ 4 月 26 日
場所　OM SYSTEM GALLERY（東京都新宿区）
点数　約 35 点

佐藤慧 写真展「ReCollection」

あの日から10年、その年月が長いものなのか、短いものだったのかは、人によりさまざまでしょう。突如として奪われた日常、愛する人々との死別、目まぐるしく姿を変える故郷……。その10年という月日の中には、一人ひとり違った日々があり、何物にも代えがたい命の物語が刻まれています。（中略）その歩みに、そっと寄り添う社会こそが、「復興」への礎となるのではないでしょうか。彼岸へ渡ったすべての人の冥福と、その悲しみを慈しむすべての人に、温かな祈りを。（佐藤慧「展覧会によせて」）

Information

佐藤慧写真展「ReCollection」

会期　2021年 2 月 27 日～ 3 月 18 日
場所　山形県総合文化芸術館 1 F ロビー（山形県山形市）
点数　約 12 点

その他の写真展

- 人権・平和に関するパネル展　河内長野市役所 庁舎 1 階 市民サロン（2021年 7 月 1 日～ 8 月 16 日）
- 安田菜津紀 写真展『照らす 生きた証を遺すこと in 奈良』 DMG MORI やまと郡山城ホール・展示室（2022年 1 月 27 日～ 31 日）

次世代と共に歩む – 若手発信者育成事業

社会課題を発信し、みなで共に考え続けることには終わりがありません。世代から世代へ、そうしたバトンを受け渡していけるように、Dialogue for Peopleでは次世代の育成にも力を入れています。この1年はコロナ禍のため、昨年まで続けてきた「東北スタディツアー」の開催や「友情のレポーター」への帯同などリアルな場での活動は行えませんでしたが、逆にこうした機会を活かした、オンラインならではの取り組みを行いました。

コロナ禍により、実際に現地に赴く「東北スタディツアー」の開催は難しくなりましたが、オンラインを利用して、全国各地の参加者（中高大学生世代）と一緒に東日本大震災の被災地とオンラインで繋ぐ**「東北オンラインスタディツアー」**を開催しました。それぞれの被災地の語り部のお話を伺うと共に、参加者同士で対話・交流を行い、東日本大震災の教訓や防災について考える時間を過ごしました。

また、将来メディア業界に携わりたい方や、実際に現場で発信に携わる若手世代を対象とした、**「D4Pメディア発信者集中講座」**も開催しました。ときに取材活動・発信活動は、取材対象者や関わる人々をリスクにさらしたり、誤ったイメージを流布してしまったりという、ネガティブな影響もはらんでいます。十分な知識、謙虚な態度、発信の意味を問い直すことで、今後のメディアの成長に寄与できたらと思い、実施した連続講座です。このほか、昨年に続き、**「大熊未来塾」**、**「世界のリアルとつながろう」**（認定NPO法人 国境なき子どもたちと共催）など、他団体と協働しての取り組みにも力を入れた1年となりました。

Information

「東北オンラインスタディツアー」
「D4Pメディア発信者集中講座」紹介ページ

次世代と共に歩む各事業についての詳細はこちらから。参加者によるレポートなども掲載しています⇒

Column

「表現の自由」は「差別の自由」ではない 安田菜津紀原告、SNS上の差別発言に対する訴訟

2021年12月8日、弊会フォトジャーナリスト、安田菜津紀を原告に東京地方裁判所に訴状を提出しました。安田、および在日コリアンへのヘイトスピーチに関する訴訟となります。2020年12月、Dialogue for People公式サイトに、『もうひとつの「遺書」、外国人登録原票』と題した記事を掲載しました。この記事は、安田の父の家族のルーツと生きた道のりの一端を、古い書類をたよりにたどったものです。この記事には大きな反響がありました。温かな言葉をかけて下さった方もいれば、明らかに記事の内容を読まないままでの反応、差別発言もSNS上に散見されました。そうした状況を「仕方がない」で終わらせることなく、毅然としてヘイトスピーチ・ヘイトクライムにNOと言える社会を築いていくために、安田は訴訟を行うことを決断しました。

差別の問題は、「心の傷つき」という問題に留まりません。ヘイトスピーチは、社会的マジョリティの側との力の不平等を背景に、矛先を向けられたマイノリティに恐怖心を抱かせ、「声をあげたらまた言葉の暴力にさらされる」という沈黙を強い、日常や命の尊厳を深くえぐるものです。日本社会にはいまだ、包括的に差別を禁止した法律も、独立した人権救済機関もありません。時折、ヘイトスピーチを規制する動きに対して、「表現の自由への侵害だ」という声を耳にします。けれどもそれが誰かに沈黙を強いるものである以上、矛先を向けられた人々の「表現の自由」はすでに踏みにじられているのです。「表現の自由」は「差別の自由」ではないことを明確にした上で、今回の訴訟が、必要な法整備に繋がる一助になればと願っています。

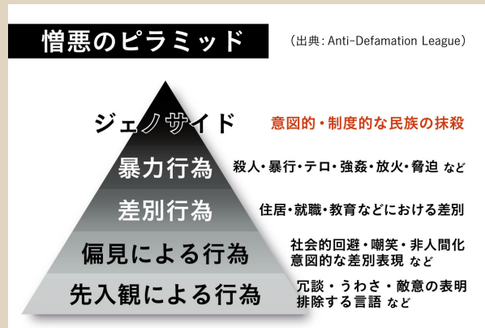
Glossary

「憎悪のピラミッド」とは何か？　ヘイトスピーチの害悪

「ヘイトスピーチ」＝「憎悪表現」と訳されることもありますが、実際にはマイノリティ（社会的少数者）に対する否定的な感情を特徴づける言葉であり、「差別扇動」という訳の方が適切です。

「差別扇動」にはふたつの害悪があります。ひとつ目は、そうした言動を繰り返すことによって、その対象となっているマイノリティ集団を「差別をしてもよい存在である」と社会に伝えてしまうこと。ふたつ目は「魂の殺人」とも言われるマイノリティに属する人々に与える深刻なダメージです。自らが同じ人間であること、社会の一員であることを否定されることにより、呼吸困難、難聴などの心身の不調や、恐怖や自己喪失感、無力感にさいなまれ、さらなる被害を恐れて声をあげられなくなる「沈黙効果」等が生じます。

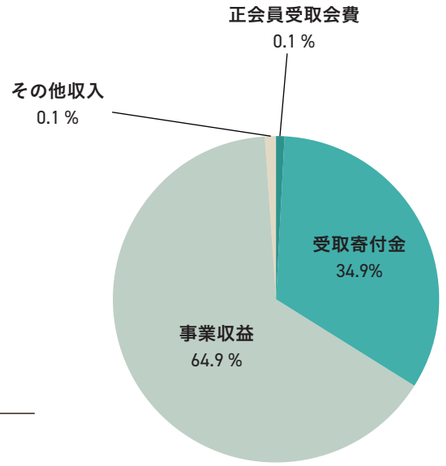
下の図は、偏見が憎悪に、そして暴力、ついにはジェノサイド（意図的・制度的な民族、国籍などの集団の抹殺）にいたる過程を表現した「憎悪のピラミッド」です。



会計報告

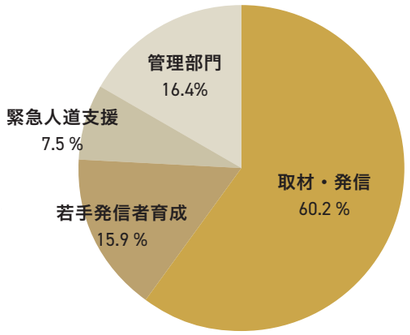
収入の部

項目	金額（単位：円）
正会員受取会費	72,000
受取寄付金	19,684,107
特定目的寄付	0
事業収益	36,680,373
その他収入	30,951
合計	56,467,431



支出の部

項目	金額（単位：円）
取材事業・発信事業	25,348,242
若手発信者育成事業	6,685,576
緊急人道支援事業	3,156,448
管理部門	6,893,880
合計	42,084,146



私共は、特定非営利活動促進法第 18 条に基づき、特定非営利活動法人 Dialogue for People の 2021 年 2 月 1 日から 2022 年 1 月 31 日までの第 2 期の業務監査及び会計監査を行ない、その結果、業務が適正に執行されており、会計について証拠書類及び関係書類は、記載すべき事項を正しく記載し、また支出すべて領収書等の証憑と合致していることを認め、ここに報告いたします。

2022 年 4 月 6 日

監事 石井宏明　　監事 潤間拓郎

※ 活動報告書および財務諸表の全体は Dialogue for People ウェブサイトにてご確認いただけます。　https://d4p.world/about/

支援者のみなさんの声

Messages from Supporters

金田 幸江さん

日々目まぐるしく上書きされる世界各地の出来事に、遠く離れて当事者性を想像することさえも難しい昨今、D4Pは写真と文章でいつも私たちに問いかけてくれる唯一無二のメディアだと思います。私たちが見ること（知ること）のできない景色や物事の本質に迫る“マジョリティ自らが変わっていくための報道”を実現すべく、慧さん菜津紀さんがこれからも世界中を駆け巡ることが出来ますよう微力ながら息長く応援します。

鷲野 有花さん

毎日が忙しく日々をこなすことで精一杯になっているとき、わたしはどうしても視野が狭くなり自己中心的な考え方になってしまいます。そんなときD4Pの記事を読んだり音声配信を聞いたりすると、どの話題も自分に関係ないものはなく、わたしはこの社会の構成員の 1 人として生きているんだとハッとさせられます。何度でも自分の行動や考え方を省みて、不合理なことがあっても諦めずに考え続け、今日より良い明日のために一歩ずつ進んでいきたいと思います。

赤倉 優蔵さん
（プロボノ）

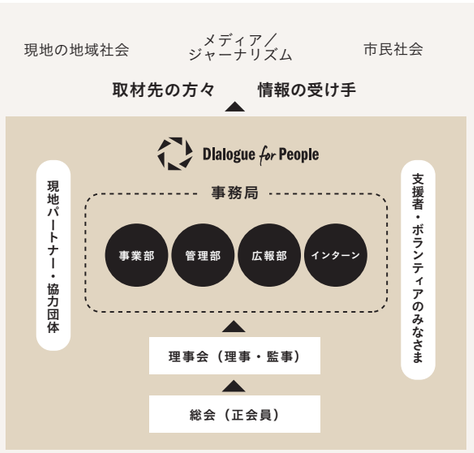
「この人たちをサポートしたい」ここには私がそう心から思える人たちがいました。この人たちの言葉を一人でも多くの「心」に届けたい、私がDialogue for Peopleの活動を支援し続けるモチベーションです。一人ひとりに寄り添われた言葉は、少しずつでも、人、そして社会を変えていくと信じています。

組織概要

名称	特定非営利活動法人 Dialogue for People （ダイアローグ フォー ピープル）
所在地	〒165-0026 東京都中野区新井 2-10-3 KSビル 202
設立	2019 年 3 月 23 日
法人格取得	2019 年 5 月 22 日
認定取得	2022年1月7日 有効期間：2022年1月7日から 2027年1月6日まで 番号：３生都管第1069号
代表理事	佐藤 慧 ／ D4P事務局員
副代表理事	安田 菜津紀 ／ D4P事務局員 中山 大輔 ／ D4P事務局員
理事	石川 梵 ／ 写真家・映画監督 小澤 いぶき ／ 児童精神科医 在間 文康 ／ 弁護士 谷口 真由美 ／ 法学者
監事	石井 宏明 ／ 団体職員 潤間 拓郎 ／ 行政書士
顧問	矢萩 邦彦 ／ 会社役員

組織図

※2022年2月末現在



事務局スタッフ（2021年度）

中山大輔、舩橋和花、安田菜津紀、西田朋世、佐藤慧（事務局員）
阿部育子、吉澤果穂、塚原千智、桐生愛、土屋実伽子、佐藤ゆき、塚﨑天輝、金将来、北川鈴乃、田中滉、永橋風香、木元花、鮎川芽衣、中野ちさと、小俣杏香 ほか2名（事務局インターン）

Dialogue for People ご支援のお願い

Dialogue for People

「伝える」を「支える」ことから、世界と「つながる」

国内外の取材、記事や動画の発信、自主企画の運営などのDialogue for Peopleの活動は、みなさまからのご寄付に支えられています。声なき声に耳を傾け、世界の「無関心」を「関心」に変える、伝える活動へのご支援・ご協力をどうぞよろしくお願いします。

マンスリーサポーター募集中！
ご寄付は税控除の対象になります。

ご寄付のお申し込みは
ウェブサイトから

活動の様子や新着コンテンツをおしらせ！

SNS随時更新中
フォローはこちらから

再生可能エネルギー100%で、印刷工場が所有する施設や車両、購入した電力などエネルギーの製造時に排出されるCO2全量をカーボンオフセット（相殺）した「CO2ゼロ印刷」で印刷しています。また大気汚染の原因物質であるVOC（揮発性有機化合物）を削減したノンVOCインキを使用しています。

FSC ミックス 紙 | 責任ある森林管理を支えています FSC® C009309
リサイクル適性Ⓐ この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。
GREEN PRINTING JPPI P-B10164
ZERO® CO2 PRINT
VOC FREE™

©2022 Dialogue for People All rights reserved.（2022年5月発行）